

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター
NCGM通信

2022.9.2

Vol.4 第4号

6月～7月 (季刊)



NCGM研究所大会議室で対面での発表が行われ、リモートでも参加できました

7月15日、研究所 夏季リトリートを開催しました

「Feel the NCGM Plus」第4号です。表紙の写真はNCGM研究所主催による夏季リトリート*の様子です。

夏季リトリートは、若手研究者がそれぞれ最先端の研究成果を発表・討論する場として毎年行われています。本年は、15日8時30分から10時間に及ぶ研究発表（口演）を行いました。感染対策を講じたうえで、対面での発表は3年ぶりで、リモートでの参加も可能なハイブリッド形式で開催されました。口演では、23の演題について合計25名が発表し、約150名が参加、最後まで積極的な討論が行われました。

*リトリート (retreat) とは、研究の分野では、研究者が研究成果の発表などを行い、さらなる発展を目指す機会を指しています。



開会挨拶を述べる満屋裕明研究所長



病院長挨拶を述べる杉山温人院長

開会挨拶で、満屋所長は「新事実を得るには想像力が必要だが、それだけでは充分ではない。実験や観察に基づいてのみ検証し、検証した結果についてのみ考えを進め、過去からの、もしかして単に引きずってきているにすぎない結論（ドグマ）には、決して重きを置かず、証拠に基づいてのみ、考え、全てを疑う事、これが私たちがサイエンスを進める唯一の道」というスライドを映写し、科学者としての考え方を示しました。



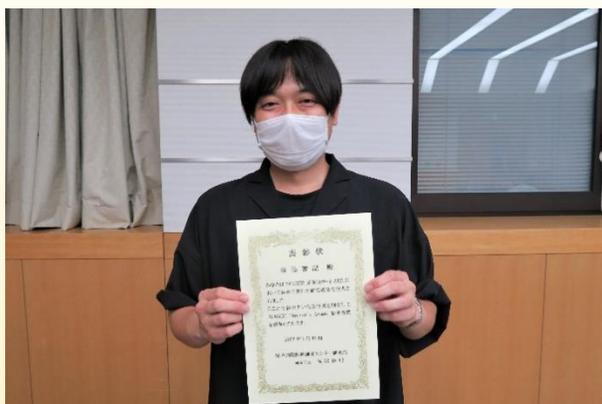
口演の様子は、リモートでも視聴できるようカメラで撮影しました

杉山院長は「センター病院は、臨床研究中核病院を目指しています。そのためには十分な臨床研究が必要になります。しかし、それには基礎の研究、ベースがないと進めることはできません。お互いにブレインストーミングすることによって、新しい研究、新しい知見につながっていくと思います」と述べました。

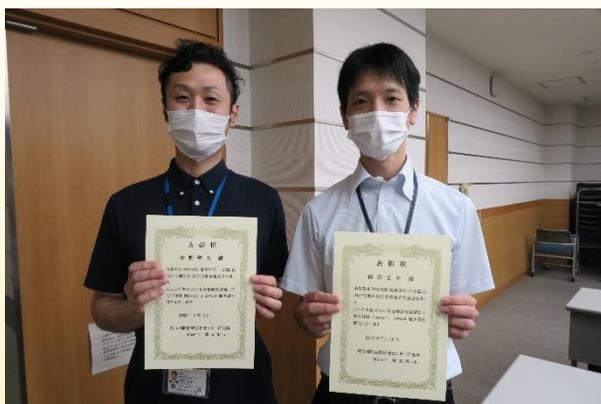


閉会に当たり、国土典宏理事長は「NCの評価で一昨年度までになりますが、研究所は、5年連続『S』という最高の評価をいただいています。皆さんに大いに貢献いただいていると思います。今日も素晴らしい発表ばかりで、これからの発展を期待しています」と述べました。

(NC:ナショナルセンターの略称)



最優秀賞を受賞した高品さん



優秀賞を受賞した中野さんと柳田さん

全ての演題を終え審査結果が投票により決定されましたが、満屋所長は「結果の順位は大変な僅差でした。いずれも優れた研究であったと、評価した方々は、かなり迷われたのでは、と思います」と述べました。

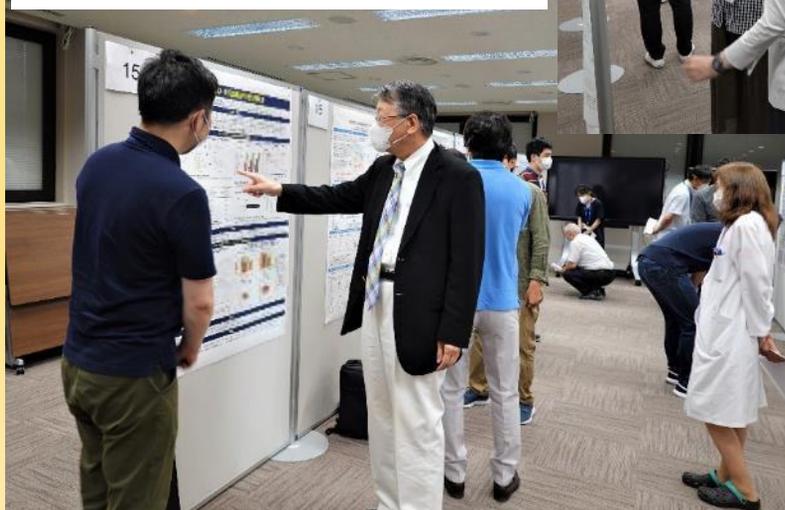
最優秀賞受賞：難治性疾患研究部 高品智記さん

優秀賞：脂質生命科学研究部 柳田圭介さん、動物実験施設 中野堅太さん



閉会挨拶で、武井貞治企画戦略局長は「着任前、私は厚労省の側から研究支援を長い間行ってきました。今日は、素晴らしい研究がたくさんあることを実感しました。来年に向けて企画戦略局としても支援させていただきます」とエールを送りました。

7/14 ポスターセッションの様子



研究所中会議室などで、数々の研究成果をポスターで発表しました。多くの方々が発表者の説明を聞くなど、活況を呈しました。

7月7日、「GS1」のCEOが、NCGMの医療情報システムの見学に来られました

医療情報基盤センター長 美代賢吾

「GS1」はベルギーに本部を置く、バーコードなどの標準化を推進する国際機関で、世界110以上の国・地域が加盟しています。

GS1のPresident & CEOである、Renaud de Barbuat氏が、NCGMのGS1バーコード・RFIDタグを活用したシステムの見学のため来訪され、医療情報基盤センターとSPDを視察しました。

GS1バーコードは、医薬品、医療機器の国際標準コードで、医療機関内の医薬品や医療機器の管理に広く用いられています。一方、患者安全や診療報酬の適正化などの、

医療そのものへのバーコードの活用は、世界的にも緒についたばかりです。この領域で、実証実験を経てすでに実用化しているNCGMのシステムが、グローバルな先進事例として取り上げられ、CEOの視察先として選ばれました。

Barbuat氏らは、整形外科インプラント機器の手術室への受渡し管理システム、手術で使用した物品のバーコードを用いた電子カルテへの記録、カテーテル室での在庫管理や使用記録システムを実際に見学され、熱心に質問されました。



(左から、GS1 Japan 植村部長、美代センター長、Barbuat氏、GS1 Japan 前田常務、同 森理事)



整形外科インプラント管理システムを紹介



カテーテル管理システムを視察

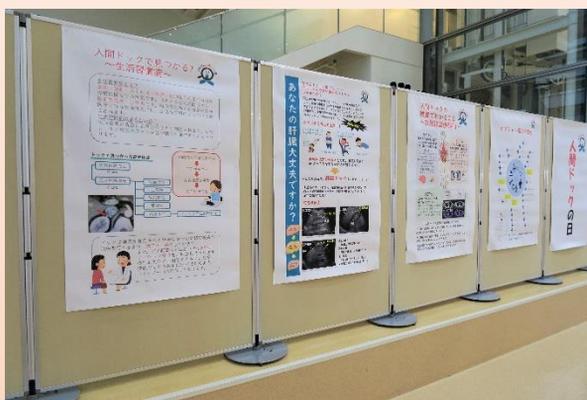


トンネルゲート型の医療材料一括読み取り装置

7月11日～15日、センター病院アトリウムで、「人間ドックの日」イベントを開催しました

7月12日は「人間ドックの日」です。1954（昭和29）年のこの日に国立東京第一病院（現在の国立国際医療研究センター病院）で最初に組織的に人間ドックが行われたことにちなんでいます。

NCGM人間ドックセンターでは、この機会に、センター病院アトリウムに数々のポスターを展示しました。最新機器を備え、様々なコースを用意していますので、ぜひご利用ください。



梶尾裕・人間ドックセンター長と呂軍・センター長補佐（左）、アトリウムでの展示



エントランスを入ると落ち着いたデザインのスペースが広がります。



人間ドック施設内には、基本コースを行うための医療機器を揃えており、施設内でスムーズに検査を完了することができます。また、センター病院の専門診療科との連携も行っており、病気が発見された際には、対応の専門診療科へご紹介いたします。オプションでMRIの検査も可能です（写真左）。電話：03-3202-8007

6月12日、GARDPとNCGMが、アジアを中心に世界的な共同臨床研究を加速する基本覚書を締結しました



国土理事長、臨床研究センター、国際感染症センター、GARDP職員一同

Global Antibiotic Research and Development Partnership（グローバル抗菌薬研究開発パートナーシップ：GARDP）とNCGMは、アジア地域を中心に世界的な臨床研究ネットワークの構築に取り組むための基本覚書(MOU)を締結しました。

今回締結されたMOUの一環として、GARDPとNCGMは、日本を含むアジア地域、および世界において薬剤耐性感染症の治療に関する規制当局への申請や、公衆衛生上のエビデンス収集に資する臨床試験を共同で実施することを予定しています。さらに、GARDPによって開発された治療薬・治療法に関する規制当局への申請およびアクセスの確保を予定しています。また、提携合意は、主要な集団に

おける薬剤耐性レベルに関するエビデンス収集のための臨床的および疫学的サーベイランスを実施する計画、ならびに抗菌薬が適正に使用されるように特定の臨床的調査を実施する計画を強調しています。

「NCGMとの今回の提携は、薬剤耐性感染症に対する新規治療法の開発が急務となっているアジア地域全体における私たちの臨床研究活動を加速させるでしょう」とGARDP代表マニカ・バラセガラム博士は述べています。

国土典宏理事長は「死亡率の高さが世界的に問題となっている新生児敗血症など、保健システムが脆弱な国における感染症の研究協力をぜひ実現していきたいと考えています」と述べました。

6月1日、第2回NIID-NCGM共同Webセミナー～新興・再興感染症制圧に向けての取り組み～が開催されました

本セミナーで、国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）は、令和3年度より厚生労働省の委託事業として開始された新興・再興感染症データバンク事業ナショナル・リポジトリ（REBIND）の現状について、紹介しました。

REBINDはCOVID-19をはじめとする新興・再興感染症の病態解明

の研究ならびに予防法・診断法・治療法の開発のため、生体試料及び臨床情報を収集し、利活用するための基盤整備を行う事業です。当日は、REBINDの現状を報告し、REBINDを利活用する立場からウイルス学の第一人者である研究者も登壇し、COVID-19の最前線の研究を紹介しました。セミナーは、275名が聴講しました。

[COVIREGI-JP](#)



[REBIND](#)



国土典宏理事長

国土理事長は、冒頭の挨拶で次のように述べました。「NCGMでは診療と並行して、多くの患者さんの貴重なデータや生体試料を、蓄積・整備・保存するとともに、基礎研究・臨床研究や、診断法・治療法などの研究開発に取り組んできました。特にCOVIREGI-JPでは、全国705施設から66,000人を超える患者さんの臨床情報を集積し、その解析結果を逐次報告してきました。これまでNCGMで蓄積されたCOVID-19の臨床情報・生体試料は、その少なからぬ部分が、REBINDに引き継がれ、アカデミアおよび企業の研究者の方々に利活用できるように整備を進めています。研究・開発のために必要なデータと試料を迅速に提供できるようにしていきたいと思っております。」



REBINDの概要を紹介する
泉和生研究資源部長



司会進行を務める杉浦互
臨床研究センター長



閉会の挨拶を述べる
杉山温人センター病院長

6月2日、大曲貴夫国際感染症センター長が、第18回「ヘルシー・ソサエティ賞」を受賞し、授賞式が行われました



左から、ヤンセンファーマ(株)代表取締役社長 関口修平、大曲貴夫、金子明、村上一枝、樋口秋緒、栗田主一、高橋幸宏、日本看護協会会長 福井トシ子
(敬称略、下線は受賞者)

日本看護協会およびジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社は、第18回「ヘルシー・ソサエティ賞」の授賞式を開催し、受賞者6名を発表しました。

「ヘルシー・ソサエティ賞」は、2004年に日本看護協会とジョンソン・エンド・ジョンソンによって創設されました。同賞では「より明るい今日とより良い明日に向けて、健全な社会と地域社会、そして国民のクオリティ・オブ・ライフの向上」に貢献し、助けを必要とする方に救いの手が差し伸べられる社会づくりを目指して、献身的な努力と地道ながらも尊い活動を続けてこられた個人を顕彰しています。

大曲先生は日本の感染症医療を大きく前進させた第一人者として「医師部門」で受賞しました。同

賞は、医師としての職責を全うしつつ、患者に対しさらに丁寧なサポートを提供したり、健康分野における個々のニーズや課題へ対応するなど、特筆に値する尽力や取り組みを実施された医師へ贈られます。大曲先生は、同賞のダイジェスト動画の中で次のように述べています。

「『社会をどう感染症から守るのか』ということをミッションとしてやってきましたけど、もう通常では考えられないスピードで薬なりワクチンを世の中に提供しなければいけない。誰だって我が事なのです。その我が事に対して、どうリスクに対して備えるのか、システム全体がまわらないとだめだな（と思いました）。」

授賞式には、岸田総理大臣も臨席されました。

私は2022年4月から、人事交流の一環でNCGMの看護部から国立看護大学校に異動となり、成人看護学を教えています。教員として従事しながら、急性・重症患者看護専門看護師として、臨床で働き続けたいという強い希望を病院、大学校の双方が考慮してくださり、現在は月に数回程度、臨床にも携わることができています。

看護系大学では日々進化している臨床との連携が非常に重要です。本学には、開学から「臨床教員」という先駆的な制度があります。

私も臨床教員を経験したことが、今のキャリアにつながったと思っています。臨床教員は、各NCに看護職員として所属しながら、本学の助教や助手を併任し、主に臨地実習、学内演習、時に講義を担当します。研究も役割の一つです。現在は、コロナ禍が新卒看護師の新任教育や実践への適応に与える影響を明らかにすべく、6NCでの



共同研究に取り組んでいます。コロナ禍が長期化する中で、この共同研究は、各NCの今後の取り組みにも生かせる内容だと自負しています。(NC:ナショナルセンターの略称)

看護師としてのキャリアの視点から、教員を経験することは、教育や研究の力を育むことにつながり

ます。それは結果的に臨床の質の向上にも貢献できます。このような看護教育・実践・研究を結ぶ組みが持続し、より広がりを持てるよう、私も架け橋としての役割を果たしていきたいと思っています。

<清瀬の風>は、国立看護大学校のトピックを紹介するコーナーです。



国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！ コンゴ民主共和国 Vol.11

国際協力機構（JICA）コンゴ民主共和国・保健人材開発支援プロジェクト

チーフアドバイザー 松岡 貞利（保健学博士/上級研究員）

私は、2021年10月にコンゴ民主共和国に赴任し、保健人材の基礎教育（看護・助産学科）の強化、適正配置の促進、そしてこれらの土台となる国・州レベルの保健人材開発計画の策定、実施、モニタリング・評価を支援しています。本事業は、2018年10月に開始し2023年10月に終了を迎える予定で、残すところ1年と数か月となりました。私は、チーフアドバイザーとして事業後半の統括を担っています。

関係者は、保健省、パイロット州保健局、日本人専門家、プロジェクト現地スタッフ、他援助機関な

ど多岐にわたります。時にはなかなか同意を得られない長時間にわたる協議をすることもあります。事業終了まで、引続き根気強く前進していきたいと思えます。



保健省幹部とプロジェクトの方向性について協議

日本肝臓学会総会にて、国府台病院 美野正彰・消化器内科レジデントが優秀演題賞を受賞しました

6月2日、3日に開催された同総会の研修医・専攻医セッションにおいて美野正彰（みの・まさあき）先生が優秀演題賞を受賞しました。

受賞演題は「長期生存し得た進行肝型IV型糖原病の1例」です。美野先生は「今年度の開催は肝炎・免疫研究センターの考藤達哉センター長が大会長であり、その会で受賞したことを大変うれしく思います。現地発表をさせていただき、臨場感のある場での発表は

緊張しましたが、発表に関するディスカッションも盛り上がり非常に良い経験となりました」と述べ、「今回の受賞を励みに、臨床・研究業務に一層精進してまいります」と語りました。



美野先生（左）と考藤センター長

第63回日本心身医学会総会・学術講演会を開催しました 国府台病院 心療内科 河合啓介

6月25日-26日に、標題の総会ならび学術講演会を千葉県幕張メッセ国際会議場で開催しました。大会テーマは「心身医学の原点とこれからの使命」です。

事前参加登録数は800名でした。講演内容は、元ドイツ心身医学会会長 Hans-Christian Deter先生による「ドイツにおける心身症の新しい概念と医療制度におけるその意義」、元環境大臣／医学博士／

元衆議院議員 鴨下一郎先生による「政策・行政への心身医学の実践」などです。



大会長を務めた筆者



鴨下一郎先生の特別講演後の写真

河合啓介先生が日本内観学会研究奨励賞を受賞しました

精神療法における「内観療法」は、「森田療法」とともに日本で生まれた代表的療法です。日本精神神経学会精神科専門医研修ガイドラインでも、内観療法は、認知行動療法、精神力動的療法、森田療法と並んで、これらのうちいずれかについて、指導者の下で経験することが明記されています。

5月、国府台病院の河合啓介心療内科診療科長は、内観療法の治療機序に関しての中国との共同研究

及び肥満や糖尿病など生活習慣病への内観療法の適応に関する研究で、同賞を受賞しました。



Scientists' Field

第58回日本肝臓学会総会を肝炎・免疫研究センター肝疾患研究部が主催しました

肝炎・免疫研究センター 考藤達哉センター長を会長とし、肝臓学会の学術集会をNCGMが初めて担当しました。考藤会長肝いりの新企画は、「ディベート・コロシウム（DC）」と「テクニカル・セミナー（TS）」でした。DCではクリニカル・クエスチョンを取り上げ、ディベート方式で発表が行われ、会場を巻き込んだの熱いディスカッションが行われました。

TSでは、最新の研究手法の疾患研究への応用についてトップランナーの先生からご紹介いただき、一人で悩める若手研究者の助け、また新しく研究してみたいと思う医師研究者の芽生えにつながりました。参加登録者数4046人、うち現地参加者数1436人、活気あふれる会場内で「肝臓病学、前へ」というテーマが少し実現したように感じました。（文責：由雄祥代）



6月2日（木）・3日（金）、パシフィコ横浜会議センターにて

遊びの情報ウェブサイト「たのしいあそびのじかん」新しいあそび動画を4本追加しました

センター病院小児科では、おうちの中でも、入院加療していても、自由に選択し、その子らしく楽しい時間が過ごせる、遊びのサイトに、新たに4本の動画を追加しました。ぜひご活用ください。



<http://kodomoasobicare.ncgm.go.jp/>

国際医療協力局は、公益社団法人日本産科婦人科学会より「令和3年度 健康・医療活動賞」を受賞しました

日本産科婦人科学会「健康・医療活動賞」は、地域医療、健康や疾病に関する啓発や社会貢献・国際貢献等の卓越した活動を行ってきた、日本産科婦人科学会会員または、その会員が代表を務める団体に与えられるものです。

今回、国際医療協力局は「開発途上国における母子保健・産婦人科医療向上のための人材育成制度強化活動」に対して受賞しました。今後も「開発途上国の女性の健康改善」「国際的な発信やグローバルレベルでの技術支援」そして「日本産科婦人科学会の開発途上

国との接点による国際化推進への貢献」を進め、世界と日本を繋げる役割を続けて参ります。



国土理事長に受賞を報告しました
(左から) 池田国際医療協力局長、
藤田部長、春山医師、国土理事長

第50回医療功労賞を受賞した三好知明(ちあき)先生が、6月15日、国土理事長を表敬訪問しました

「医療功労賞」は1972年に読売新聞社が創設し、過疎地や海外の紛争地など厳しい環境で長年、地域住民の健康支援に尽くした人を顕彰する賞です。6月10日、帝国ホテルにおいて授賞式が執り行われ、6月15日、推薦者である国土理事長を表敬訪問しました。

三好先生は元国際医療協力局の部長であり、池田国際医療協力局長、藤田運営企画部長を交え懇談しました。三好先生は「名誉ある賞を受賞することができ、とても光栄に思います。長年携わった国際医療協力活動を評価いただいたことをとてもうれしく思います。推薦

いただいた国土理事長にお礼申し上げます。また、長年の活動を支えていただいたNCGMの関係者すべての皆様に深く感謝いたします」と受賞の喜びを語りました。

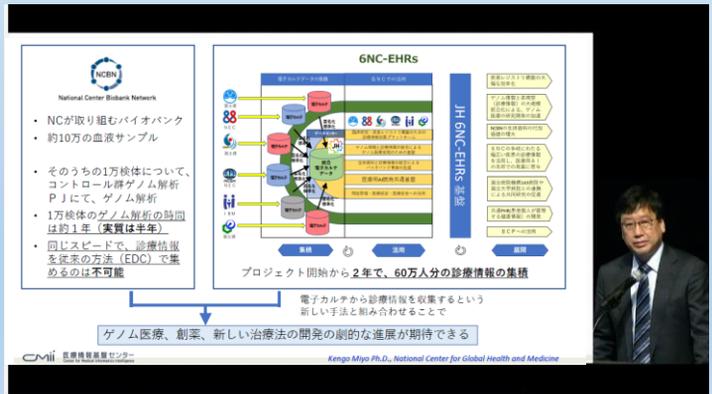


(左から) 池田国際医療協力局長、国土理事長
三好先生、藤田部長

5月23日、『デジタル立国ジャパン・フォーラム』で美代賢吾医療情報基盤センター長が講演しました

同フォーラムの特別セッション「電子カルテ改革による健康医療デジタル情報の新価値創造」では、加藤勝信衆議院議員、大島一博厚生労働省政策統括官、美代医療情報基盤センター長、笠貫宏MEJ理事長の4氏が講演しました。加藤議員は、自民党が取りまとめた「医療DX令和ビジョン2030」の3つの柱である、医療情報プラットフォームの創設、HL7 FHIRを中心とした電子カルテ標準化の推進、診療報酬改定DXについて紹介しました。大島統括官は、医療DX令和ビジョンを骨太方針中で政府の方針として実践に移していくことを述べました。

美代センター長は、自民党・政府の方針を受けて、電子カルテベンダー、創薬・医学研究等への二次利用、地域医療・介護・福祉への展開の三つの視点から、医療DXへの期待について講演しました。最後に、笠貫MEJ理事長が、PHRへの期待を述べ、全体を総括しました。



6GNC-EHRsで、開始から2年で60万人分の診療情報を集積したことを紹介する美代センター長

NCGM職員の著書紹介

乳癌患者の妊娠・出産と生殖医療に関する診療の手引き 2021年版

日本がん・生殖医療学会 ◆ 編集

「乳癌患者の妊娠・出産と生殖医療に関する診療ガイドライン」改訂委員会
委員長 清水 千佳子

乳癌患者の妊娠が再発や予後に与える影響、生殖補助医療による妊娠率や出産率への影響、さらには経済的負担やQOLなども加味し、複数のアウトカムの益と害を評価することで、患者の多様な価値観を反映できるよう臨床課題が検証された一冊。妊娠・出産を希望する乳癌患者と医療者の協働意思決

定支援に役立つガイドラインです。

金原出版
2021年10月



研修医の窓

新入職の研修医です。よろしくお願いします！
研修医1年目・久保美和



今年4月から34名の1年目研修医が入職いたしました。初めての環境に慣れない仕事で悪戦苦闘して、自分の実力不足に心が痛い毎日ですが、尊敬する上級医の先生方や親切な医療チームの方々、心強い研修医の仲間によって、とても幸せな研修生活を送っております。皆様が手厚くご指導くださり、実力を見極めて仕事を任せ、褒めるところを探して褒めてくださるNCGMの環境は最高です。自然と、「もっと働きたい！もっと成長したい！」という気持ちになります。できる仕事が毎日増え、1週間前の自分の実力とは大違いですと言

える充実感は何ものにも代えがたく、明日の自分の成長にワクワクします。

思いが勢い余って空回りしてしまうこともあります。そんな時は先生方が体調のことまでお心遣いくださり、研修医を大切にしてくださっているのだと実感します。NCGMに入職できて、本当によかったと思っております。

未熟な私たちはご迷惑をおかけしてしまうことも多いかと存じますが、どうかこれからも温かくご指導いただけましたら幸いです。精一杯頑張っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

NCGM職員の著書紹介

診察室の陰性感情

加藤 温・センター病院精神科診療科長 ◆ 著

本書では医療現場、特に外来診療で発生する「陰性感情」の成り立ちから対処法、そもそも陰性感情を生じさせないためのテクニックについて解説しています。

外来診療や医療現場で陰性感情が生じることが多いと感じている方、またこれから外来診療へ携わる方

は是非本書を手にとってみてください。

金芳堂
2021年5月



6月3日、世界とつながる みんなとつながるハッピードールプロジェクトが開催されました (センター病院小児科)

今年もホスピタルアーティスト高橋雅子さんが代表を務めるワンダーアートプロダクションからハッピードールキットが届きました。このキットを使って、子ども達が自分の“ハッピードール”を作るオンラインイベントが6階東病棟プレイルームで行われました。子ども達が作った作品写真は、ペーパーミュージアムとなり、『病院を超え、国境を超え、みんなの願いをつないでいく』プロジェクトです。

NCGMでは、子ども4名（2歳、3歳、12歳）ご家族3名が参加し、それに医師、看護師たちも加わり総勢34名がにぎやかに参加しました。いろいろな柄の布やビーズ

やボタンなどの材料で夢一杯の想像が形になるまで、子ども達も大人も一緒にハッピードール作りに打ち込みました。子ども達やママのアイデアなどが、ぎゅぎゅっと詰まった“ハッピードール”がいくつも完成しました。気がつけばみんなの笑顔と笑い声がプレイルームにあふれていました。あたたかな気持ちに包まれて、たくさんの人たちと、きっとどこかで“つながっている”『ハッピードール』イベントでした。



自慢のハッピードール達

企画開催団体『ワンダーアートプロダクション』

<https://www.masakotakahashi.website/happy-doll-project>

企画主催：子どもの療養環境を考えるワーキンググループ同

NCGM職員の著書紹介

「巻き込まれ」に気づいて子どもを不安から解放しよう！ 宇佐美 政英（国府台病院児童精神科診療科長）他◆監訳

本書は不安を抱えた子どもを持つ親御さんたちに、子どもを援助する効果的な方法をお教えするマニュアル本です。ついつい親がやってしまうこと（「巻き込まれ」と呼びます）を減らす

ことで、子どもの不安を軽減する治療プログラムを紹介しています。

岩崎学術出版社発行
2022年7月



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。